あ

【握固】

あくこ wo-gu

道教の養生術の導引法の一つ。両手の親指をまげて食指の根本におき、その上から他の4本の指を握る拳の握り方で、握ったあとは力を抜き、瞑想し道を体認しようとする動作をいう。この言葉は、古く『老子』に〈含徳の厚き、赤子に比す。……骨は弱く筋は柔にして而も握ること固し〉(第55章)とあり、嬰児が手をしっかり握りしめる意、として見える。さらに南朝梁・陶弘景『養性延命録』巻下に〈握固とは、嬰児の拳手の如く、四指を以て母指を押すなり〉(服気療病篇第4)と見える。くだって、唐・鍾離権(正陽祖師)が考案したと伝えられる八段錦導引法に、〈握固して静かに神を思う〉とあり、先の『養性延命録』巻下導引按摩篇、および、北宋・張君房撰『雲笈七籤』巻32、導引按摩に〈若し能く終日之れを握せば、邪気百毒入るを得ず〉とあるところよりすると、かなり精神的な面で重視された、と考えられる。我国においても、984年(永観2年)成立の丹波康頼撰『医心方』巻27用気に握固について見えるところよりすると、古くより紹介されていることが知られる。

小林和彦

[参考文献]—麦谷邦夫編訳『養性延命録訓註』(汲書房)、坂出祥伸「長生術」(『道教』1)、喜多村利且編著坂出祥伸・小林和彦訓注『導引体要』(谷口書店)。

●——firm grip (of a newborn infant)

【偓佺】

あくせん Wo-quan

生没年不詳。古代の仙人。松の実を食して長生したといわれ、またその実を堯帝に献上したとも伝えられる。服餌法によって長生したとされるから、おそらく漢代頃に出たものであろう。『列仙伝』は、〈槐山の薬草を採る〉と記している。つまり採薬人であり、あるいはそうした薬草を売るのを業としたものと解釈される。

山田利明

[参考文献]—『列仙伝』(中国古典文学大系8、平凡社)

【厁姨】

アンイイ Ang-i

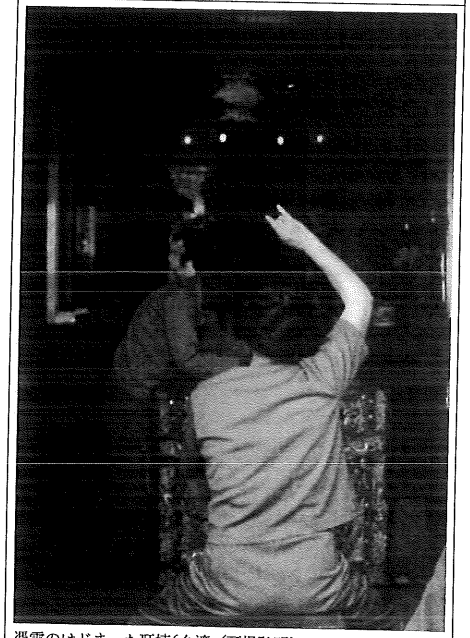
死者の霊を身に憑依させて口寄せ(関亡、関落陰)を行う巫女の台湾での称。起源からいうと、巫覡の巫は女性霊媒、覡は男性霊媒のことであったというが、後世ではこの区別をしていない。しかし台湾の漢人社会で巫女をことさら区別するのは、神明が女性の血穢を忌むところから、降神入巫を本務とする男性の童乩と峻別しようという意識のあらわれかもしれない。厁は痾瘻病者あるいは瘠せた病人のことであるというが、厁の代りに紅の字をあてて書く人もいる。厁姨の本務はあくまで口寄せであるが、現代の台湾では神霊降し(問神)や魂呼ばい(収驚)、さらには巫医の領域にまで進出している。トランスの過程を踏むことは童乩とかわらないが、トランス中の挙動は一般に童乩ほど激しくはない。厁姨に相当する巫女のことを香港では問醒婆とか問米婆というが、口寄せ・魂呼ばい・診花・運勢占いの他、結婚前に死んだ女性の霊をあずかったり、凶運に生まれた子の信仰上の親になったりする(契過)。なお清初の『広東新語』は巫女を仙姑と称し、そのうち盲目の巫女を仙姐として区別している。また福建では、口寄せをする巫女を神者、江蘇では師娘という。↦シャーマニズム

可児弘明

[参考文献]—桜井徳太郎『シャーマニズムの世界』(春秋社)、J. M. Potter *Cantonese Shamanism, in Religion and Ritual in Chinese Society* (Stanford)。

●——Ang-i, shamaness

中央は降霊中の尼姨、左は求問者(台湾／可児弘明)



憑霊のはじまった尼姨(台湾／可児弘明)

【安期生】

あんきせい　An-qi sheng

蓬萊山に住むという仙人の名。安期先生ともいう。瑯邪(今の山東省諸城県)の阜郷の人。薬を海辺に売り、学を河上丈人に受け、俗に千歳翁と呼ばれた。秦の始皇帝が山東地方を巡遊したときに引見し、阜郷の海辺に祠が建てられた記事が『列仙伝』に見えている。三日三晩ともに語り、始皇帝は金璧を賜ったが安期生は受け取らず、返礼として赤玉の舄一足を置き、〈数年経ったら、蓬萊山を訪ねていただきたい〉と書して去った。後、始皇帝は徐市・盧生にその消息を求めて船出させたが、何度となく風波に見舞われて、ついに蓬萊山の捜索を断念したという。また、漢の武帝のとき方士李少君も安期生に出会ったことを語っている(『史記』封禅書)。

小林徹行

[参考文献]—澤田瑞穂訳『列仙伝』(中国古典文学体系、平凡社)、山田利明「神仙道」(『道教』1)、『雲笈七籤』108。

【安子山】

あんしさん　Núi Yên Tử

ベトナム北部東境の聖山。ハーバック省バクニン市の東約60キロメートルに位置する標高1068メートルの主峰を中心とした連山の総称。象山ともいう。紅河デルタ東縁のドンチェウ山脈に属し、東方に奇勝ハロン湾が望見される。黎崱『安南志略』(巻1、山)などベトナムの史料によれば、同山はかつて安山といわれ安期生が得道した所という。司馬承禎『洞天福地天地宮府図』(『雲笈七籤』巻27)に第二十福地として、〈安山、交州の北にあり、安期先生の隠れる処〉とあり、唐代には交州(ベトナム北部)の道教の聖地として安山の名が現れる。『列仙伝』などによると、安期生または安期先生は中国の山東地方出身の神仙で、東海の仙島の蓬萊山に住み仙薬を所有するという。その後、安期生の伝承は各地に伝播し、沈懐恩『南越志』(『初学記』巻8)などによれば、4世紀頃には広東地方まで南下している。また南北朝期の神仙思想では、仙島は臨海地帯の諸山と結合したといわれるが、蓬萊山の一部は広東地方の羅浮山と考えられた。これらの情勢の背景には、採薬の方士たちが香薬・真珠などの南海物産を仙薬として求めた状況があり、その主要集散地の広東・ベトナム方面に新たな神仙境が想定されたと考えられる。13世紀以降、安子山は仏僧の修行地として知られ、ベトナム陳朝第3代皇帝の仁宗(1258～1308)が、同山で臨済禅系の竹林禅派を開いたことは名高い。付近には雲霄寺や花烟寺などの名刹が多い。

大西和彦

[参考文献]—『大南一統志』(海陽省、山川・寺観)、川本邦衛『ベトナムの詩と歴史』(文藝春秋)、中野美代子「蓬萊は南海へ・中国における南方イメージの変遷」(『NHK海のシルクロード』5、日本放送出版協会)、Danny J.Whitfield *Historical and cultural dictionary of Vietnam* (The Scarecrow Press)

【安鎮宅】

あんちんたく

↦「鎮宅」を見よ

【安鎮墓】

あんちんぼ

↦「鎮墓」を見よ

【按摩】

あんま　an-mo

もと仙家導引の一つ。〈技を折るは、按摩にて手節を折り、技を解羅するなり〉(『孟子』梁恵王上篇・趙岐注)、また〈夫れ按摩は、閉塞を開通し、陰陽を導引する所以なり〉(『黄帝内経素問』血気形志篇第24王氷注)とあるように、自分で自分の身体に施療し、それによって邪気を払い、身体に元気を回復させる方法。後世になると医術の一つとなったが、古くは導引とともに用いられた(『史記』扁鵲伝、『黄帝内経素問』異法方宜論第12等)。『漢書』芸文志、方技略に、『黄帝岐伯按摩』10巻とあるから、前漢時代には専著があったことが知られる。くだって南朝梁の陶弘景『養性延命録』に、百病を除くとして説いた導引按摩篇が見える。また、唐代の文に〈按摩博士は導引の法を教ゆるを掌り、もって疾を除き、損傷折跌はこれを正す〉(『唐書』百官志　尚約局の条)とあるから、唐代には宮廷で医官が行っていたことが分かる。我国に於いては701年(大宝元年)に按摩博士・按摩生が置かれて、初めて按摩の名が見え、また、医疾令の註釈に〈按摩というのは、他人を牽挙揚批し、あるいは摩して筋肉を調暢し、邪気を散洩せしむるなり〉と見えて、中国の唐代とほぼ同様に重んじられていたことがわかる。また、丹波康頼撰『医心方』養生篇導引第五(984年、永観2)には、自から按摩するの法として18の姿勢が見え(実際は17勢)、導引の一種と思われる。その後、江戸時代に入り、香川修庵が1729年(享保14)に『一本堂薬選』4巻を著わして、初めて按摩を治病の一つとして用いることを唱えた。さらに藤林良伯が1799年(寛政11)に、『按腹・鍼術・按摩手引』を著わし、按摩の法が備わった。ついで、太田晋斎が1827年(文政10)に一気留滞説の立場から『按腹図解』を著わし、〈按摩は専ら一元気の留滞を活発にし、臓腑を安住にし、腸胃を調和し、血脈を融通し、骨節を和利し、筋絡を舒暢し、飲食を進め、二便を利し、気力を盛んにする〉と説いて、按摩導引の養生における重要性を説いた。その後、明治32年の「按摩術営業取締規則」により、身分・業務が規定されたが、近年見直しの風潮が興っている。

小林和彦

[参考文献]—石川保秀『東洋医学通史—漢方・針灸・導引医学の史的考察—』(自然社)、大黒貞勝『導引口訣鈔』(谷口書店)、富士川游著・小川鼎三編『日本医学史綱要』1・2(平凡社)、『日本漢方腹診叢書』全6巻(オリエント出版社)。

●——massage

【夷夏論】

いかろん　Yi-xia lun

南朝の道士・顧歓の排仏のための議論。『仏祖統紀』によれば、467年(泰始3)に発表された。夷は夷狄、夏は中国を意味し、〈刻舷の沙門〉と〈守株の道士〉、すなわち頑迷固陋の沙門と道士との調停をはかることが表むきの執筆の理由とされているが、実際は排仏のための文章。〈道〉と〈俗〉と〈跡〉をキーワードとして構成される。まず冒頭に道教経典から老子が仏として生まれ変わったという『玄妙内篇』の文章を、つづいて仏教経典から『法華経』と『無量寿経』の取意である〈釈迦成仏して塵劫の数有り〉、および『太子瑞応本起経』の〈あるいは国師道士、儒林の宗と為る〉という文章を引き、国師道士とは老子、荘子のこと、儒林の宗とは周公、孔子のことにほかならぬとして、仏教と中国の聖人の教えの根本の〈道〉が究極的に一致することをひとまず承認する。しかしながら、〈俗〉すなわち各地域・民族に固有の風俗習慣はそれぞれ異なり、〈道〉の具体的なあらわれである〈跡〉すなわち教法は〈俗〉に相い対応するものであるから、そもそも夷狄の〈俗〉を教化するための仏教は中国に行うことはできぬ、というのが議論の骨子であって、善美なる夏の〈俗〉に対応